

当世海外留学事情

中国英字新聞チャイナ・デーリーが報じたところによると、中国教育省が集計した結果2010年の中国人留学生は世界最多の127万人だったそうです。

中国が世界第2位の経済大国となったということも背景にあるでしょう。

中国教育省の集計によると、昨年新たに国外にわたった留学生は28万5千人（対前年24%のアップ）であり、その大半は自費留学とのことですから、個人的にもそれだけの負担ができるようになったということだと思います。

これに対して、日本の場合は、文科省の調査によると2004年度の8万3千人がピークで、その後は減り続け、2008年度は6万7千人という状況であり、中国の19分の1に過ぎません。中国と日本との人口の差を考えても、随分と水を開けられている感じがします。

こうした状況について、中国の青年は国外に出ることに積極的だが、これに対して日本の若者は内向き志向が強いために国外に出たがらない。このようなことでは将来の日本が心配だという声が、特に年配の方々から聞こえてきます。

また、最近では、海外留学だけでなく海外への転勤も嫌う傾向が強くなっているようですので、若者の内向き志向は確かに強くなっているように思います。ただ、こうした傾向については、「今の若いもんは軟弱だ」とか「志が低い」というように、若者達を批判することだけでは済まないものがあると思っています。

社会人類学者の中根千枝さんによると、日本は「タテ社会」であり、そうした社会においては「ウチ意識」が強く、定着性を強く志向していること。だから、その社会の成員は当然「ソト」に出ることに大きな抵抗を持っていると述べています。また、日本人全体、そして日本の中枢の人たちは、まだ本当に「ソト」の世界を理解しようとしていないし、これは「ソトに出る者」がどちらかというと相対的に低い地位に置かれてきたという社会学的なシステムと密接に関連しているとも述べています。

中根千枝さんの代表的日本人論「タテ社会の人間関係」が発表されたのは1

967年ですから、今から40年以上も前のことになります。つまり、日本及び日本人の外国との付き合い方というものは、そもそも40年前も今もさして変わっていないということです。今日の状況は、今の若者達に特有のことではなく、むしろ元々日本人の中に潜んでいたものがより顕著に表れてきたと考えるべきでしょう。

だからといって、仕方がないでは済まされません。こうした状況を変えていくためには、若者達の意識を変えていくこともさりながら、まずは社会における人材の評価システムを変えることだと思います。例えば、既に終身雇用制は破綻しているのですから、新規採用に当たっては3年間に限り新規学卒者扱いにするなどといわずに、そうした制度自体を全廃すべきでしょう。また、留学生を積極的に、かつ透明性の高い形で評価していくことも必要だと思います。

志だけでは息切れします。インセンティブが働くような仕組みを作ること、そうでなければ人の心は動きません。(塾頭 吉田 洋一)